

逆境にあつて大道に生きる（平生鈞三郎）

ひらお はちさぶろう



高 阪 薫

（甲南大学 学長）

アメリカ発の深刻な世界的経済不況は、一昨年後半から日本にも影響を及ぼし、企業の営業不振や倒産によって経済社会に不安を招いています。大学も例外でなく就職率の低下に現れ、ほぼ一〇〇%を誇っていたわが甲南大学も前年度に比べ一五%程度下がると言われています。当然入学生も授業料の支払いに苦慮することでしょう。諸政策を講じて一日も早い景気の回復・安定が望まれます。それと貸与・給付奨学金や授業料減免措置を各大学が、文部科学省が、関係団体が配慮すべきではなからうかと思えます。

それにしても、いま、不安定な日本の政治・経済・社会を思えば、若い学生諸君は必ずしも前途に明るい展望を持つことはできないでしょう。三月四月は卒業・入学の季節ですが、学長の私としても、何らかの励ましの言葉を込めた式辞を贈らうと考えます。はたして暗雲のしかかる彼らの今後の人生に、ふさわしい激励の言葉が有るのでしょうか。今までに経験しなかつた甘くない現実と将来に向かって進むのですが、卒業後には厳しい試練が待ち受けています。

まさに逆境の時代です。歴史は安定と平和の時代ばかりではありません。近代日本を振り返れば、いつも政

治も社会も不安定で、戦争に活路を見出したこともあり、犠牲と貧苦に喘いだ悲惨な時期の方が多かったといえます。最近こそ戦争はしませんが、平和だとはいえ、市場原理の競争社会がもたらした拜金主義で、こころは荒み、生命が脅かされ、凶悪犯罪が多発しました。治安は悪化し、打算的利己主義が蔓延し、モラルも低下しました。「勤勉・真面目・礼節」等のこのころの文化を誇ってきた安全な国がいまや危機的状況にあります。

このような時代と社会にあつて、誰をモデルに何を模範としてどのように生きたいのか。最近「坂の上の雲」に描かれる明治の高揚期に活躍した秋山兄弟や、幕末の志士「坂本龍馬」に逆境の時の生き方を求めて、巷間ではブームとなつています。まさに「まっことかつこいぜよ」ということなのでしょう。

私は、いまそれらに匹敵する人物として、甲南大学の創立者平生鈺三郎（一八六六―一九四五）を取り上げたいと思います。私は、本学の入学式や卒業式で、時に平生に触れて、常に逆境に立ち向かう精神と実践をもつて大道に生きた人であつた、と話します。あらゆる不利な局面にあつても信念を枉げず真つ向から戦つた人でした。

平生の活躍を時系列的にみれば、そのことがよくわかります。

慶応三年（一八六六）美濃加納藩士の家に生まれ、貧乏の故に岐阜中学中退。苦学して東京外国語学校露語科に合格。官費奨学生として学業に励み、さらに高等商業学校（現一橋大学）を卒業します。官費奨学生の恩義を生涯忘れませんでした。この経験は後半生に生かされます。一八九一年税関吏として赴任した韓国・仁川では、米国宣教師が去つて途絶えていた英語塾を起こして「仁川英語学校」を創り、在留邦人や、地元の人に英語を教えています。その学校はいまに繋がつて「仁川高校」として現存しています。

また帰国後（一八九三）は、二七歳で県立神戸商業学校長となりますが、学校は、風紀乱れ、教育は荒廃し、財政状況も悪く、予算も削られ、整理・廃校すら言われていました。それを平生は持ち前の教育の理想を兵庫県議会に粘り強く訴え、予算をつけさせ、荒れた生徒を教え導き、見事立て直します。

その後東京海上火災保険に勤め、一八九四年ロンドン支店に派遣されましたが、現地の営業成績悪く、撤退

かといわれていたのを、平生の経営的才腕で立ち直らせ、以後も英国・欧州の拠点となりました。

帰国後は英国で学んだ徳育・体育・知育の三位一体の近代教育に情熱を傾け、実業界にありながら、明治四三年（一九一〇）に甲南学園の幼・小学校、大正八年（一九一九）には中学・高校を創立します。一方私財を投じて「拾芳会」（一九二一）を設け、学費が払えぬ優秀な旧制高校生に奨学金を給付しました。これはまさにかつて平生が国から奨学金を給付されて学業を修得できたことへの恩返しとしてなされた篤行です。「拾芳会」は平生が亡くなるまで続きました。

昭和初期の金融恐慌では、今日と同じく日本経済・社会が落ち込み、神戸の川崎造船も倒産・整理の憂き目にあいました。当時六〇万人市民のうち二〇万人が関係する川崎の倒産は、神戸の命運を握るものでした。平生は見込まれて社長（一九三三）になりましたが、一身を捧げて、再建に尽力します。給料無しで働き見事二年で立て直しました。そればかりか、再建途上で社員・職工の福利厚生を考え、川崎病院や、職工さんの教育施設東山学校を設けました。それ以前にも平生の人を救う精神は、甲南病院や灘購買組合（現コープこうべ）といった医療福祉関係の設立にも関与しています。

昭和初期の金融恐慌や沈滞する日本の政治や人口政策を憂えて、一億の民を救う政策として、かねてから胸中にあつたブラジル移民の促進を唱えます。自らブラジル経済使節団長（一九三五）となり、渡伯し両国の貿易額を飛躍的に増大させるとともに、移民の人数を増やすことにも成功させました。

財界から政界への進出ですが、それは頼まれての民間抜擢の文部大臣でありました。以前より政界での活躍を期待され要請されていたのですが、昭和十一年（一九三六）の二・二六事件のあと政局が混乱し、その後第二次世界大戦になる歴史を見てもわかるように、日本が、国際社会で生き残っていかれるのかどうかの瀬戸際に立たされ、戦争か平和か、日本の命運を賭けるといった政情にありました。その非常時に広田弘毅文相内閣の文部大臣を仰せつかったのです。しかし平和志向で臨む平生文相も一年しか持たなかつた広田内閣では、平生の理想も義務教育八年制法案を残したに止まりました。これも志ゆえの「義をみてせざるは勇なきなり」とい

うことでしよう。

このような各界での活躍を見ていると、時に創業の人、あるいは再建の人、そして経営の人であります。しかもジャンルを超えて努力し成功した人で、人間として信用できる尊敬できる人として、甲南ばかりでなく、広く社会で範となる人物だと思います。

よく見ると、平生にはぶれないプリンシプル（原理）があり、筋を通しているのが分かります。何かを起す、立て直す時に、それがまさに「世のため人のため」であるということ、己の為は二の次であることです。しかも絶対私利私欲に走らない。他人に利する利他の精神に徹しています。具体的には創業や、再建をやるのも、お国のため会社のためであり、同時に社会的弱者、貧者や病者が常に頭の中にあり、その人たちのためにやろうとしていること。常に働くものに味方し、即ち労働者への心配りがあります。そして青少年への育成と援助に力を注ぐということがあります。小さな慈善から大きな救済まで、常に利他の精神にブレはありません。

これが、いつでもどこでも平生の胸中にあつて、なにかやる時にそこが言動の基準になっています。長く実業界に君臨して、マネージメントの経験の中から培われた信念であろうと思います。それは保険会社からの相互扶助の精神であり、企業リーダーたるもののノブリス・オブリージュ（地位ある者の任務の重さ）であり、教育経験からのヒューマニズムであり、或いは平生の武士道精神からの志と義であります。そこからくる平生の、共に働いて互いに助け合う「共働互助」や、国のために一身を捧げんとする「報国報民」が見えてきます。他人のために喜ばれる利他の精神に基づく「共働互助」や「報国報民」は今の時代にこそ必要な生きる指針であり、モラルではないでしょうか。平生の生き方に学びたいと思います。そして「児孫の為に美田を買わず」で財産は甲南学園に投じ、「世界に通用する人材」の育成に生涯関わり貢献しました。

かつて、甲南学園の理事長を務めた伊藤忠兵衛（伊藤忠商事株式会社）は、「死せる平生は、学校の精神的基礎となつて、よりよく、より正しき精神を養成しつつある」と記しています。甲南はいまも平生の精神を受け継いでいるといつていいでしょう。さらに伊藤は、平生が卒業生の結婚式で花婿を指して「この青年は、私

の学校を出ておるから、人格は最も信用していただきたい。少なくとも私同様ご信用ねがいたい」と祝辞を述べ、平生が花嫁と親族に人格を保障したという話を取り上げ、それを聞けば「教師も卒業生も自分の言動に責任を持たざるを得まい」と、伊藤は言っています。

平生は、常に甲南の人物教育に力を注ぐと、日記に「I am from KONAN」と胸をはって言える甲南学園にしたい、と記しています。

私も平生にならって、甲南卒業生に、「皆さんは甲南を卒業するのだから人格は保証されています、自信を持って『I am from KONAN』と言いつつ、この逆境に志を持って社会の荒波に挑戦してください」と言える大
学でありたいと思っています。